

強者の戦略

強者の国語・〔現代文・問題編〕

東大・京大等の最難関大学志望者に向けた「強者の国語」の1回目です。今回は、短いですが、なかなか歯ごたえのある文章です。さっそくチャレンジしてみましょう。時間は20分が目安です。

【強者の戦略オリジナル問題】

以下の文章は中井正一『絵画の不安』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

真に在るものは不安の上にある、というハイデッガーの考えかたには何もか深いものがある。存在して、しかも存在のさながらの姿より隔てられているという嘆き。存在のふるさとに還りたきのぞみ。それがわれわれの「今」であり、「ここ」であり、「自分」の露あらわな現うっつである、と彼はいう。

その意味で、真の自分の姿は永遠なる「問い」の上にある。

言葉の上に、光の上に、音の上に、人は問いを、問いの上にまた問いを重ねる。それは真に在りたい深いねがいである。

われわれが存在の中に在りながら、画布をもってそれを隔て、それに寂しずかに立ち向うのは、在るものがそのさながらに向ってなす「問い」の設立である。

存在が存在に向ってなす「問い」の設立、そこに画布の意味がある。自分を自分から画布をもって隔ち、画布をもって押しやること、それは自分が自分に向ってなす親しき問いである。

自分が自分から隔てられているその隙すきま虚に、あるいは画布は寂かに滑り入るともいえよう。

われわれの前にまずある白い画布は、実にいまだ問われざる一つの疑問記号フラクショナルである。われわれが今ここに在りながらしかも真に在らざる不安、それが画布の寂しき白さである。

白い画布、それは一つの不安である。

人間は問いをもつかぎりにおいて生きている、とハイデッガーはいう。その意味で、それが畏おそれを滲ませているかぎり、画布はいのちの中にひた涵り、いのちの中に濡れているともいえよう。ハイデッガーはいう。この不安こそ、自分が自分の内奥より喚ぶ言葉なき言葉への悪寒のごとき畏

強者の戦略

れである。自分が自分よりすり抜けること、自分が自分より隔てられていること、それが生ける時間であり、生ける空間であつて、見ゆる時空はその固き影であり、射影にしかすぎない。

生ける空間、いいかえれば、自分自身への隔りの寂しき、隔りの愛憐の中に、影なる空間を写しとるはたらきが、画布の情趣アであり、画布に触るる浸み透る心境である。

問 「画布の情趣」(傍線部ア)とはどのようなものか、本文全体の趣旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。